

野垣 好史 (埋蔵文化財センター 主査学芸員)

はじめに

北アルプス・薬師岳 (2,926m) は、古くから信仰の対象とされてきた山である。埋蔵文化財センターは、平成 22 年度に山頂での分布調査を行い、奉納剣・角釘・刀子・銅製品・青磁・祠材といった遺物を確認した (野垣 2012)。これを受け、平成 23 年 4 月、『富山市遺跡地図』に「薬師岳山頂遺跡」を登載した。

今回、山頂にある築 52 年の祠「薬師堂」が老朽化のため再建されることとなった。令和 4 年 9 月に祠の解体、整地、石積みの積み直しが行われたため、文化財保護法に基づき工事立会を実施した。本稿ではその成果を報告する。

1 薬師岳の概要

(1) 地理・歴史的環境

薬師岳は、富山市南東部に位置し、地籍は富山市有峰に属する。どっしりとした気品のある山容は「北アルプスの貴婦人」とも呼ばれ、日本百名山の一つに選ばれている。

開山は明徳元年 (1390) と伝えられる。麓の有峰村に住んでいた駕籠の担荷棒作り職人「ミサの松」が薬師如来に導かれて登頂、如来が姿を消した場所にお堂を建て「岳の薬師」として祀り、有峰村には宮を建て「里の薬師」にしたとされる。有峰村の人々は、毎年旧暦の 6 月 15 日に 15 歳から 60 歳までの男子が総出で山頂に参詣した。女人禁制であった。承応 3 年 (1654) の祈願文には、3 年に一度、剣を奉納すると記されており、昭和 30 年代までは山頂の祠前には奉納剣が小山のように積み上げられていたという。模造剣の奉納は薬師岳信仰の大きな特色である。

(2) 祠の変遷

山頂の祠は、過去に幾度も建て替えられている。五十嶋一晃氏 (2004)、佐伯哲也氏 (2010・2011)、古川知明氏 (2012) の論考を参照すると、次の変遷が認められる (注 1)。

1 期 江戸時代以前を 1 期にまとめるが、本来はさらに細分できるであろう。伝承によれば、明徳元年 (1390) にお堂を建て「岳の薬師」を祀ったとされる。文献では、享保 3 年 (1803) の山廻り記録に「堂北居南面 七尺五寸二四尺」の記載がある。また、文化 7 年 (1810) 『上奥山御境目廻り』や文化 12 年『有峰御薬師参詣』は三室構造とし、後者は「御薬師堂。眞南向。行間九尺、見込四尺」と記す。なお、構造不明ながら、天明 2 年 (1782) の『新川郡奥山御境目絵図』では山頂に赤色の建物が描かれる。本図は写図で、原図は江戸中期の成立とされる (立山博物館 2002) ことから、天明 2 年より前の祠とみられる。

2 期 明治 20 年頃から大正 12 年 8 月以前に存続。間口八尺、奥行約三尺で三室構造。

3 期 大正 12 年 8 月以前から昭和 32 年以降、昭和 34 年までの間に存続。昭和 27 年以降のある時点から、強風のためか板張りとの棟持柱がなくなる。

4 期 昭和 32 年以降のある時点から昭和 34 年まで。間口 50 cm 程の小祠で、後に現在 (6 期) の祠の中に納められた。

5 期 昭和 34 年から昭和 44 年まで。周囲を石積みで囲む。奉納剣に落雷があり全壊。

6 期 昭和 45 年から令和 4 年まで。今回解体された祠である。

2 工事立会の成果

(1) 調査概要

工事立会は、令和4年9月25・26日に行った。前日の24日に太郎平小屋まで行き宿泊、翌25日は山頂での立会后、太郎平小屋で宿泊し、26日も再び登頂して立会。終了後に下山した。25・26日とも晴天に恵まれた。調査担当者は、埋蔵文化財センターの鹿島昌也主幹学芸員と野垣好史主査学芸員の2名である。

工事内容は、①祠の解体、②解体後の地面の整地、③祠周囲の石積みの一部積み直しである。いずれの作業も人力による。①・②の作業は25日に完了し、③は25日後半から26日に行われた。遺物は、表1のとおり発見地点ごとに（一部は遺物種や材質ごとに）収納袋を違えながらA～Oに分けて取り上げ、後日すべてにNo.1～60の通し番号を付けた。

(2) 調査の成果

①祠の解体 解体した祠の規模は、幅3.2m×奥行1.94m×高さ2.16mの単室構造である。正面扉は観音開きとなる。解体は、屋根材から順に上から行われた。

A（遺物No.1）は祠内に置かれていた薬師岳の石銘板である。B（No.2）は地点不詳だが、祠内とみられる。C（No.3）は祠の屋根材に貼り付けられていた奉納剣、D（No.4～7）は屋根下の中央梁の上に置かれていた奉納剣である。C・Dのうち4点は昭和の年号があり、材質はトタンもしくはブリキである。A～Dは現代の遺物である。

E（No.8～17）は、屋根の下中央梁の上に置かれていた。大小の鉄製奉納剣が主であるが、16・17は長形状の鉄板で過去の祠に使われていた建築金具かもしれない。

F（No.18）は、梁の上に置かれていた鉄製奉納剣である。

G（No.19）は、背面の中央の柱に立てかけられていた鉄製奉納剣である。

H（No.20）は、現代の奉納剣とみられ、錆もない。柄部分に、☆印と苗字とみられるローマ字が陰刻されている。

I（No.21～31）も祠の解体中に見つかったが、詳細な位置は不詳である。いずれも鉄製奉納剣である。21は厚みがあり、柄尻が環頭状になる特殊な例である。

以上のうちC～G地点の遺物は、昭和45年の祠建築時に梁上に置かれたり、屋根材に貼り付けられたりした可能性がある。昭和44年に落雷で全壊した旧祠に元々奉納されていたものや、周辺に散乱していたものが納められたのではないかとみられる。ただし、梁の上は建築後でも置くことはできたとみられるため、必ずしも建築時に限定されないかもしれない。

②地面整地 解体後の祠の下の地面は、岩石がごろごろした状況であったため、祠の再建に備え、大きな岩石は除去したうえ細かい土砂を敷き平坦に整地された。作業過程でJ（No.32・33）、K（No.34）の遺物が出土した。Jの2点はいずれも鉄製奉納剣で、Kはテツボラの貝殻である。採集はしていないが、現代の空き缶などもあった。

③石積みの積み直し 祠は方形の石積み（幅約7m×奥行約6m）上に建立されている。この石積みの一部積み直しも行われた。大きく崩れていた西側（祠に向かって左側）での作業が主で、北側（祠の裏側）も一部積み直された。

西側の積み直し中、下方の裏込めにあたる部分の岩石の隙間からL～N（遺物No.35～59）の遺物が出土した。奉納剣を中心とし、他に角釘・丸釘・刀子？・留具？・寛永通宝・現代硬貨、木材があり、江戸期から現代の遺物が混在する。一代前の昭和34年建立の祠（5期）の写真にみえる石積みは、正面向かって右側は現在と同じである。対して3期の祠の写真を見

ると、祠は若干高まりの上に建つが、現在のようなしっかりした石積みは見えない。また、4期は小祠であることを考えると、現在の石積みは、昭和34年の5期祠の建立時に構築され、部分的な修築を経て現在に至るとみてよい。したがって、今回出土した遺物は、昭和34年の石積み構築時に周辺に散乱していた江戸期から現代の遺物が、一緒に埋まったものとみられる。構築後にあたる昭和51年の10円硬貨は石の隙間から混入したのであろう。

（3）遺物について

遺物の大半は奉納剣である。明らかに現代とみられる資料を除くと、いずれも薄い鉄板で作る、円形の鏝を有する、切先に向かって幅広になる形態は共通するが、大きさや柄の形状、孔の有無・位置などによりバラエティがある。大きさは、小型品は8.8cm（No.36）から大型品は復元すれば50cmを超えるであろうもの（No.31）までである。柄は、端部が直線的なタイプと尖るタイプがあり、直線的なものの一部には径1～2mmの孔がある。古川知明氏が指摘するとおり（古川 2012）、端部が尖るタイプは祠の柱や屋根材へ刺突され、孔があるタイプは柱材や扉へ釘による打ち付けがなされたのであろう。その他は祠前へ置かれたのかもしれない。

今回の調査では、薬師岳でこれまで確認されていなかった銭貨（寛永通宝）が4点見つかった。うち少なくとも2点は古寛永と新寛永に分類できる。石積み内の一部から見つかった点を考慮すると、本来はさらに多く存在する可能性が高い。薬師岳ではこれまで江戸時代の遺物は奉納剣がほとんどを占めていたが、銭貨の出土によって信仰の異なる側面も考慮される。また、大日岳や雄山山頂では宋銭も見つかっているのに対し、薬師岳は寛永通宝のみである。資料が少ないことによる偶然かもしれないが、信仰のあり方の違いに基づく可能性もある。

おわりに

山頂では、今回見つかった遺物以外にも、過去に多くの遺物が確認されている。奉納剣を主としつつ、それ以外に銭貨・角釘・刀子・雁股鏃・陶磁器・八角鉄鋌・和鏡・火打鎌等がある。時期も中世から現代まで幅広い。これらにより今後さらに薬師岳信仰の実態が明らかになることが期待される。

注

（1）野垣2012では3期と4期を1つにまとめて5期区分としていたが、本稿では6期区分としたい。

参考文献

- 五十嶋一晃 2004『岳は日に五たび色が変わる』太郎平小屋50周年記念誌編集委員会
大山町 1964『大山町史』
50周年記念誌編集委員会 2004『太郎平小屋50周年を迎えて』
小林高範 2011「薬師岳に奉納された模造剣について」『富山市の遺跡物語』No.12 富山市埋蔵文化財センター
佐伯哲也 2005「大日岳及び薬師岳で採集した遺物について」『大境』第25号 富山考古学会
佐伯哲也 2007「山頂採取遺物から推定する山岳信仰—大日岳及び薬師岳の採取遺物から—」『日本海文化研究所公開講座平成18年度記録集 山からみた日本海文化Ⅱ』
佐伯哲也 2010「薬師岳山頂の信仰遺跡について」『大山の歴史と民俗』第13号 大山歴史民俗研究会
佐伯哲也 2011「採取遺物から見る薬師岳信仰」大山歴史民俗資料館企画展記念講演会資料
立山博物館 2002『絵図に見る加賀藩と黒部奥山』
野垣好史 2012「薬師岳分布調査報告」『富山市考古資料館報』No.49
広瀬 誠 1977「薬師岳の信仰と有峰びと」『白山・立山と北陸修験道』名著出版
古川知明 2012「薬師岳山頂の奉納品について」『大境』第31号 富山考古学会

発見位置	遺物No.	取上日	遺物	材質	長	幅	厚	備考
A 祠内に納置	1	220925	石銘板	花崗岩	30.0	16.2	1.6	〔裏師岳 2.926m〕の浅刻。2つに割れる。
B 祠内?	2	220925	石	石	5.1	3.5	2.0	〔新世界平和 祈禱型コロナ終息(団体?名)〕のマジック書
C 祠屋根材へ貼付け	3	220925	奉納刺	プラスチック?	21.8	6.1	0.05以下	〔奉獻 昭和二五、八年八月吉日 家内安全無難息災 越中国高岡(個人名)〕の刻む。円形鐙
D 祠屋根下の中央梁の上	4		奉納刺	トタンorブリキ	27.5	7.0	0.05	〔奉納 昭和三十四年八月二十九日(個人名)〕の墨書。方形鐙
	5	220925	奉納刺	トタンorブリキ	27.5	7.3	0.05	〔奉納 昭和三十四年八月二十九日(個人名)〕の墨書。方形鐙
	6		奉納刺	トタンorブリキ	26.5	6.5	0.05	〔奉納 昭和三十四年八月二十九日(個人名)〕の墨書。方形鐙
	7		奉納刺	トタンorブリキ	21.7	5.8	0.05以下	〔(個人名)〕を刻む。鐙付近に孔
E 祠屋根下の中央梁の上	8		奉納刺	鉄	13.0	2.1	0.1	円形鐙
	9		奉納刺	鉄	(9.4)	2.2	0.1	身残存
	10		奉納刺	鉄	(12.2)	4.6	0.1	身の一部残存。孔あり
	11		奉納刺	鉄	(19.5)	4.8	0.1	身の一部残存。
	12	220925	奉納刺	鉄	(18.7)	2.8	0.1	鐙の一部・柄残存。円形鐙。柄長く、中央付近に孔
	13		奉納刺	鉄	(22.6)	7.0	0.1	鐙・柄残存。円形鐙。柄尻尖る
	14		奉納刺	鉄	(18.9)	7.9	0.15	身の一部・鐙・柄残存。円形鐙
	15		奉納刺	鉄	(33.2)	5.4	0.1	身下半・鐙・柄残存。円形鐙。柄尻と身元付近に孔。
	16		建築金具か	鉄	18.2	4.2	0.1	方形
	17		建築金具か	鉄	20.1	4.8	0.15	方形。端部に孔。
F 祠梁の上	18	220925	奉納刺	鉄	(7.1)	5.4	0.1	鐙・柄残存。円形鐙。柄は180度折れ曲がる
G 祠前面中央の柱に立てかけ	19	220925	奉納刺	鉄	(11.1)	6.2	0.1	身先端残存。
H 祠北側土台上(北西隅)	20	220925	奉納刺	鉄<(錆なし)>	16.2	6.9	0.4	〔ヤト(「苗字」のローマ字表記)〕の浅刻。方形鐙
I 祠内	21		奉納刺	鉄	14.6	5.2	0.4	厚みあり。方形鐙。柄尻は環頭状となる。柄に孔2
	22		奉納刺	鉄	14.2	2.5	0.1	鐙を表現しない形態。柄尻尖る
	23		奉納刺	鉄	9.2	1.9	0.1	円形鐙。柄尻尖る?。柄は「コ」字状に折れ曲がる
	24		奉納刺	鉄	11.7	2.5	0.1	円形鐙。柄尻尖る。柄は「コ」字状に折れ曲がる
	25		奉納刺	鉄	(11.2)	2.3	0.1	柄尻欠損。円形鐙
	26	220925	奉納刺	鉄	(13.5)	(2.9)	0.1	鐙の一部・柄残存。円形鐙。柄尻尖る
	27		奉納刺	鉄	16.1	2.7	0.1	円形鐙。柄尻尖る。柄は「コ」字状に折れ曲がる
	28		奉納刺	鉄	14.0	2.7	0.1	円形鐙。柄中央に孔
	29		奉納刺	鉄	(16.2)	3.6	0.1	身残存
	30		奉納刺	鉄	(12.4)	5.8	0.1	鐙・柄残存。円形鐙
	31		奉納刺	鉄	(22.7)	7.9	0.15	大型。身の上半部残存

表 1 工事立会で確認した遺物

発見位置	遺物No.	取上日	遺物	材質	長	幅	厚	備考
J 祠の上)	32	220925	奉納刺	鉄	(14.5)	2.5	0.1	身残存
	33		奉納刺	鉄	(9.1)	4.4	0.1	鐙付近残存。円形鐙
K 祠の下(地上)	34	220925	貝殻(テツボ)	貝	5.0	3.2	2.5	
L 西側石積み内	35		奉納刺	鉄	9.9	2.2	0.05	円形鐙。柄尻付近に孔
	36		奉納刺	鉄	8.8	2.0	0.05	円形鐙。柄尻尖る。柄尻は直角に折れ曲がる
	37		奉納刺	鉄	(6.9)	2.1	0.05	身・鐙残存。円形鐙
	38		奉納刺	鉄	(8.3)	(2.2)	0.1	身の一部残存
	39		奉納刺	鉄	(11.6)	(1.8)	0.1	身残存
	40		奉納刺	鉄	(7.9)	3.9	0.1	鐙・柄残存。円形鐙。柄中央に孔
	41		奉納刺	鉄	(3.5)	1.3	0.1	柄残存
	42	220926	奉納刺	鉄	(11.6)	4.4	0.1	身の一部・鐙・柄残存。円形鐙
	43		奉納刺	鉄	(13.0)	2.7	0.1	身先端・柄尻欠損。円形鐙
	44		奉納刺	鉄	(12.7)	2.5	0.05	身先端・柄尻欠損。円形鐙。柄尻尖る
	45		奉納刺	鉄	(6.4)	(1.5)	0.1	鐙・柄残存。円形鐙。柄尻尖る
	46		奉納刺	トタンorブリキ	10.2	3.0	0.05以下	円形鐙。鐙と柄尻に孔。鐙状の残。鐙と柄に文様彫る。「アヨウ」の未書
	47		角釘	鉄	6.6	1.0	0.3	頭部折り曲げ
	48		丸釘	鉄	5.0	0.6	0.6	
	49		刀子か	鉄	(5.9)	1.0	0.2	刃部の一部残存。
	50		留具か	鉄	(4.3)	0.9	0.3	
M 西側石積み内	51		寛永通宝	銅	1.4	1.4	0.1	
	52		寛永通宝	銅	1.4	1.4	0.1	
	53	220926	寛永通宝	銅	1.4	1.4	0.1	古寛永
	54		寛永通宝	銅	1.3	1.3	0.1	新寛永
	55		5円硬貨	銅	1.2	1.2	0.1	昭和26年
N 西側石積み内	56		10円硬貨	銅	1.3	1.3	0.1	昭和51年
	57		木材	木	(5.9)	(2.0)	1.0	旧祠材か
	58	220926	木材	木	(11.1)	(4.1)	1.2	旧祠材か
O 祠の鐙を吊っていた釘	59		木材	木	(30.0)	(4.0)	2.4	旧祠材か
	60	220926	釘	鉄	17.7	1.6	0.9	上部で折れ曲がる

※大きい単位はcm。()は残存
※備考欄の()は、氏名・団体名等が書かれた部分を伏せた箇所



薬師岳山頂



祠の内部



梁の上から見つかった奉納剣



祠の解体作業



祠背面の中央の柱に立てかけられた奉納剣



解体後の地面整地



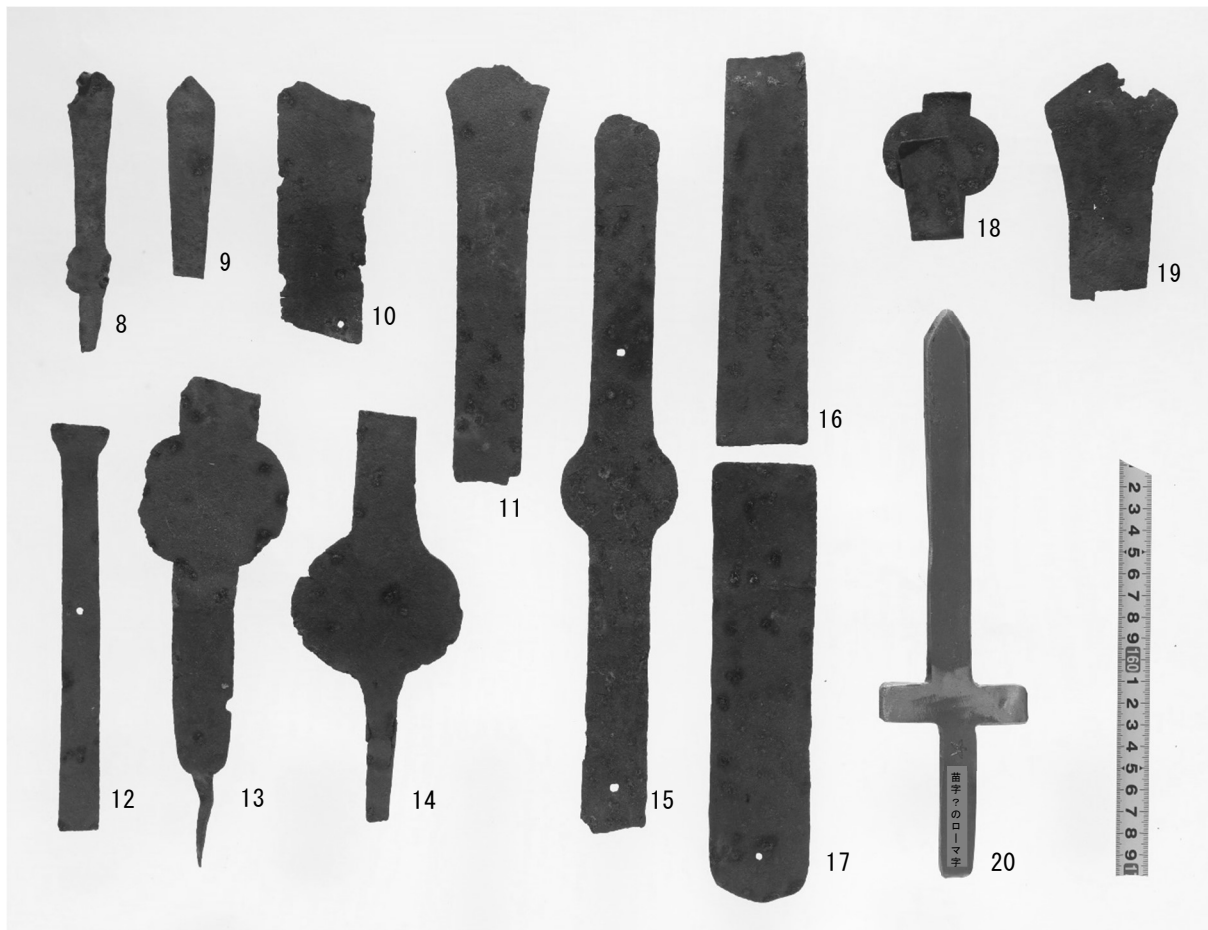
西側石積みの崩落状況



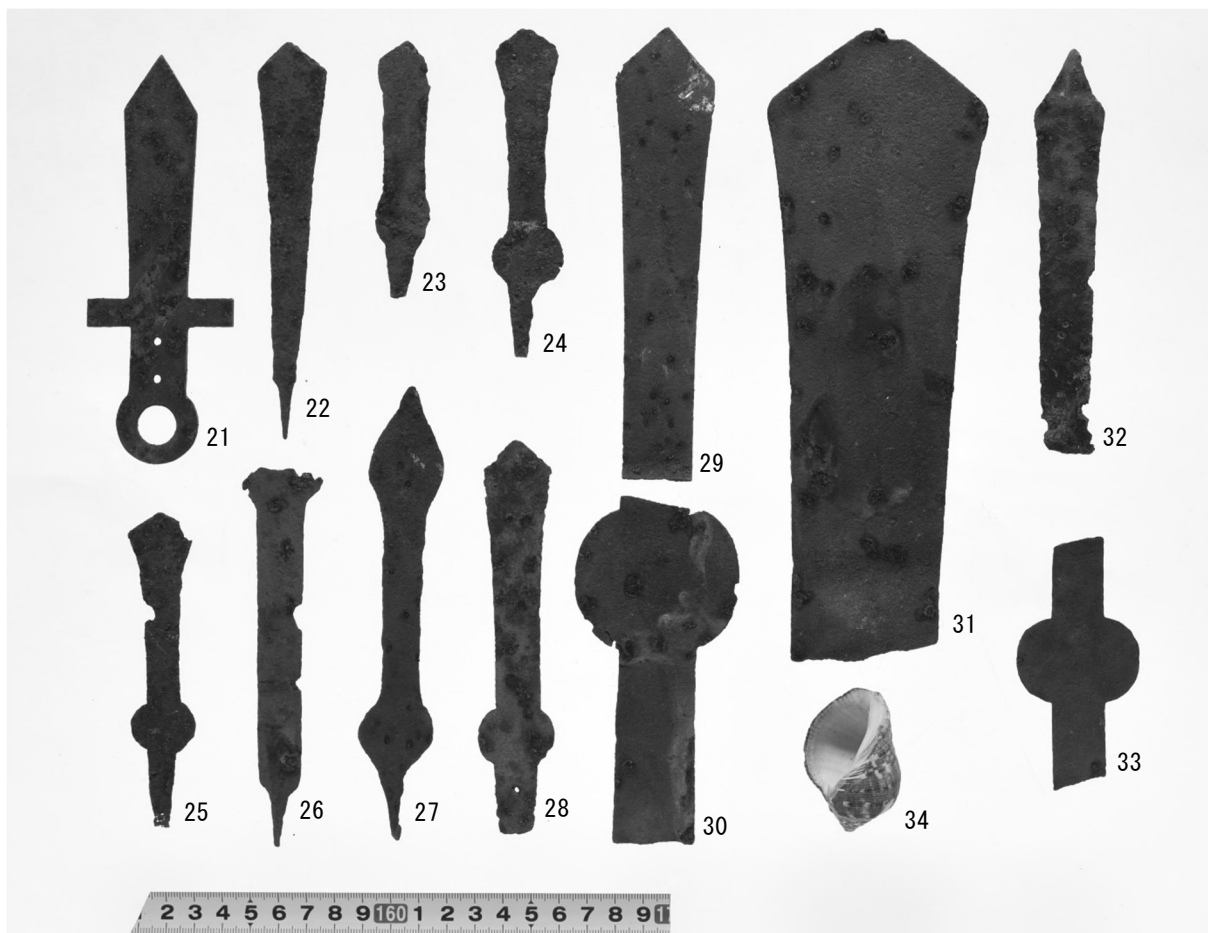
西側石積み内から出土した奉納剣



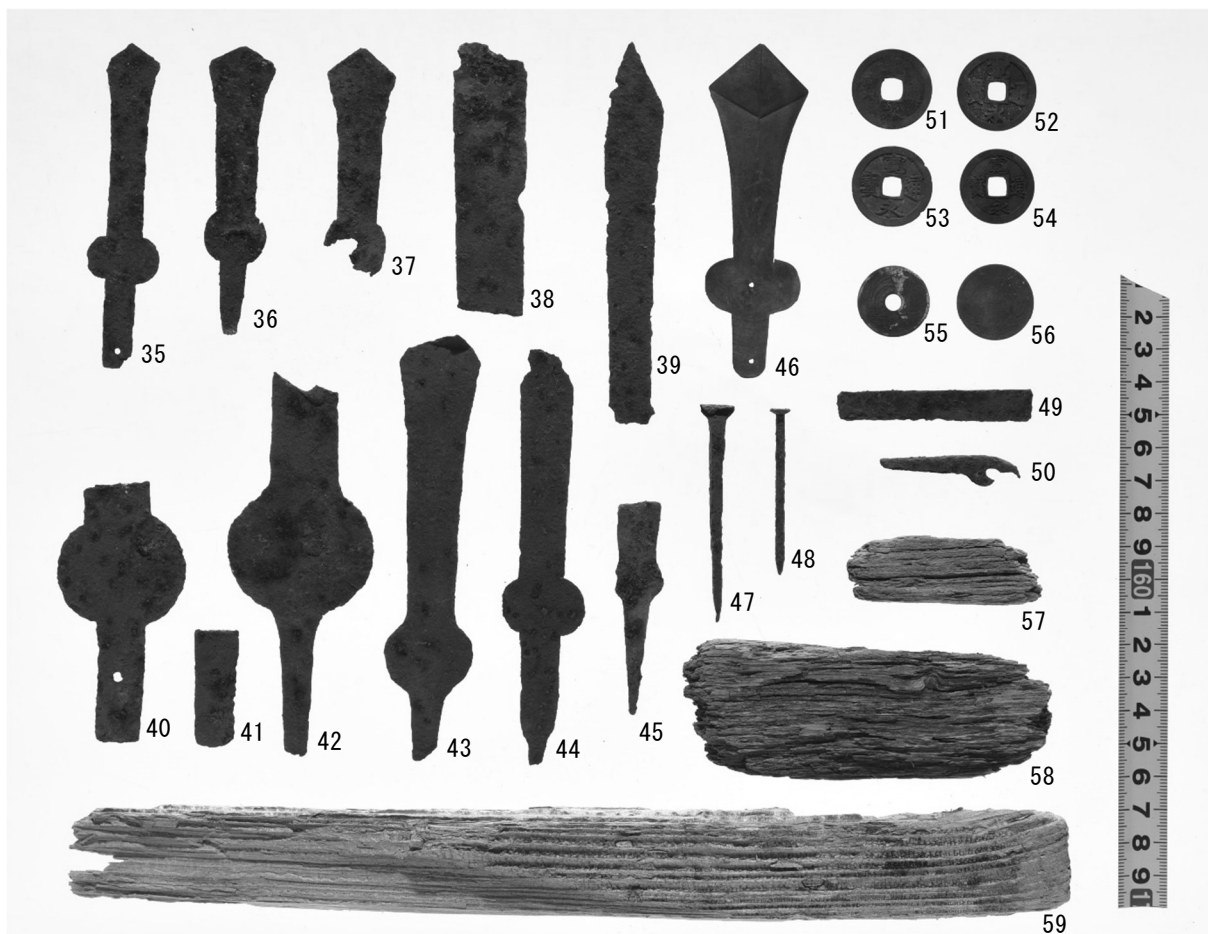
遺物 (1)



遺物 (2)



遺物 (3)



遺物 (4)